

「伊豆の踊子」研究ノート

— 主題を求めて —

中 田 康 治

1 はじめに

「伊豆の踊子」の第五章後半に次のような一節がある。

「二十歳の私は自分の性質が孤兒根性で歪んでゐると敵しい反省を重ね、その息苦しい憂鬱に堪へ切れないで伊豆の旅に出て来てゐるのだった。」（岩波文庫82ペ）

中村光夫も指摘しているように、「伊豆の踊子」の「私」が抽象的な青年で、作者と切りはなされて独立性を持っていると考えられるのであるが、この一文は、明らかに作者康成自身を語ったものがあり、ここに作者の臍の緒が残されているといえる。この作品を解釈する場合、この一文を見逃すことは許されない。わたしはこの一文の背景を探ることから主題に迫りたい。

2 孤兒の感情

川端康成は明治三十二年（一八九九）に生れた。明治三十三年（一九〇〇）、康成が数え年二歳の時父の死にあつた。翌年、三歳（数え年以下同）の時に母を亡くした。幼少にして死別したために両親についての記憶は持っていない。

母の亡くなった明治三十四年に、ただ一人の姉弟である姉は伯父の家に移けられ、別れた。

明治三十九年（一九〇六）康成が八歳の時に祖母が亡くなった。

そして、その二、三年後に、姉が伯父の家でなくなった。

父母、祖母、姉に死別した康成は十六歳の時、祖父と死別するまで祖父と二人暮らしをしたわけである。祖父は、両親のない康成をたえずいたわっていたようである。

大正三年三月三日の日づけの「春夜友を訪ふ」という作文には友人の家を訪れた時の心境を次のように記している。

「例の如く父母をも交へて五人火鉢を囲みて団欒す。話題あれこれと走馬燈の如し。いつに交らぬこの一家の人々の温情こそ嬉しけれ。父母なく兄弟なき余は萬人の愛より尙厚き祖父の愛とこの一家

の人々の愛とに生くるなり。談笑数刻にして辞す。月おぼろに。」
(新潮社・全集第十四巻・「少年」より・256頁)
大正三年五月に祖父は亡くなった。唯一の支えを失ったわけである。

「葬式の日多くの会葬者から弔問を受けてゐる最中に私は突然鼻血が鼻孔を流れ下って来るのを感じた。(中略)この鼻血が祖父の死から受けた私の心の痛みを私に教へた。」(全集第一巻・「葬式の名人」より・256頁)といふ。

記憶にはつきり残る唯一の肉親である祖父を失った康成は唯一人だといふ、底知れぬ寂しさにおそれたのである。十年間はまさに二人きりで喜びと悲しみを共にしてきた肉親であるだけに、また、晩年は盲目となり、病の床にいたままの祖父であつただけに、他の肉親の死の時には感じられなかつた「心の痛み」がはじめて訪れたのである。

祖父を失つて全くのひとりものとなつた康成は伯父の家にはさまれた。

大正四年、茨木中学の四年生の時、その寄宿舎にはいった。長い休みをむかえろと孤児の寂しさがおそつたらしい。大正五年、康成十八歳の十二月二十三日の日記には「長い休みが近づくと、少しづつ家なき児のかなしみがにじみ出て来る。」(全集第十四巻・「少年」より・256頁)と記されている。

この川端康成の特殊な環境よりくる孤児の感情は「葬式の名人」における次の一節ではつきりするようである。

「……葬式の情景に刺戟されて私に親しい亡き人々の存命中や臨終や葬式の日を思ひ出す。」また「反対に思ひ出すことによって私の

心は自然に静かになる。そして生前私に縁遠い人の葬式であればあるだけ、私は自分の記憶と連れ立って墓場に行き、記憶に対して合掌しながら焼香するやうな気持ちになる。だから少年の私が見も知らぬ人の葬式にその場にふさわしい表情をしてゐたにしても伴りてなく身に負うてゐる寂しさの機を得ての表われである。」(全集第一巻256頁)

この「身に負うてゐる寂しさ」が孤児の感情なのである。「それは、世間一般で『孤児』というとすぐ連想するやうな、性格的なひねくれや陰気さではない。」(山本健吉・近代文学鑑賞講座「川端康成」・6頁)

ところで康成はこの孤児の感情をどのように意識していたのであろうか。「油」の一節を中心にして考えてみよう。

少年時代には、「父の写真を机の上に飾つてゐたように、『孤児の悲哀』を甘い涙で悲しみ、それを訴える手紙を男や女の友だちに書いた。」といふ。そして「しかし間もなく、孤児の悲哀が何物だか少しもわかつてゐない、と言ふよりも、わかるはずがないのだと省みるようになった。両親が生きてゐたらかうだが、死んだからかうだったのだと、この二つのことがはつきりわかつてこそ孤児の悲しみだが、事與死んでゐるのだから生きてゐたらどうだったかは神だけが知つてゐるのだ。若生きていたらさらに不幸なことがなかつたとも限らないではないか。それなら顔も知らない父母の死のために流す甘い涙は幼稚な感傷の遊戯なのだ。しかし痛手にはちがいない。この痛手は自分が年を取つて一生を振り返つた時に初めてはつきりするだろう。その時までは、感情の因習や物語の模倣で悲しむものかと思つた。そして私の心は張りつめていた。」といふのであ

る。

たとえば学校の入学とか、卒業とか、何か事がある度に、周囲の人々は、「お父さんやお母さんが生きていらしたら、どんなにお喜びになるでしょう。」という言葉をかけるのである。彼等は康成の父母の姿を思い浮かべ甘悲しい感情を味うのだろうが、康成にとっては父母の記憶もないし、親子の感情も知らないのであるから、強い反撥を感じたらしい。次のようにいっている。

「世間の人々はなぜ子供を親や家庭と結びつけて考えないと気がすまないのか。なぜ私の成功を第一に喜ぶ者が、影も形もない、私が見たこともない父母であると、空想しなければならぬのであるか。——この調子では人々は、私の婚礼の宴席の上をも、父母の葬いの行列を通らせずにはおかないつもりらしい。」

この周囲の人々の同情に対する反撥や、父母のことを言われることに対する反撥は、「張りつめていた」という心から出たものであろう。

「しかしそうした意気張りがかえって私をいびつなものにしてあることを、高等学校の寄宿寮で私の生活が自由にのびのびと生きていくところから気づき初めた。」と反省している。「そうした心が私の心の傷や弱身を意固地にかばうほうにばかり働いていたのだ。悲しむべきを素直に悲しみ、寂しむべきを素直に寂しみ、その素直さを通してその悲しみや寂しみを癒すことの邪魔をしていたのだ。前々から私は、明らかに幼い時から肉親の愛を受けないことに原因している恥ずべき心や行いを認めて人生が真暗になることがたびたびある。そんな場合、『ええい。』と投げ出したくなる心持を殺し、静かに自分を哀れむように傾いて来た。劇場や公園やいろんな場所

幸福な家庭の親兄弟に連れられた子供とか、子供らしい子供同志でいるのとかに、何気なく見惚れ、見惚れている自分を見いだしてほろりとし、ほろりとする自分を見いだして、『馬鹿』と叱ることがあった。しかし、その叱る自分がいけないのだと思うようになった。」と言いつつ、孤児根性の超克のためには、「父の三、四十枚の写真をいつとはなくすっかりなくしてしまつたように、死んだ肉親なぞにはこだわらなくなればいいのだ。孤児根性が自分にあるなどと反省しなければいいのだ。『まことに美しい魂を自分を持っている。』ひそかに抱いているこの気持を余計な反省の蔭にいじけさせずに、野方図に青空へ解放してやればいいのだ。」と考えた。

「こんなふうな気持で二十歳の私は人生の明るい広場へ出て来た。幸福に近づきつつあるような気がして来た。ちょっとした幸福にも我ながらあきれるほど有頂天になるようになって来た。私は自分に問うのだ。『これでいいのか。』『幼少年時代を幼少年らしく過ごさなかつたのだから、今は子供のように喜んでよろしい。』こう答えて自分を見逃してやるのだ。やがて来るすばらしい幸福一つで、私は孤児根性からすっかり洗われそうにさえ思える。永い病院生活を逃れた予後の人が初めて目にする緑の野のように、その時は人生が見えるだろうと待ち遠しい。」と結んでいる。

「孤児根性からすっかり洗われそうに」思えるところまで回復して来ているのである。

ここまでくるとは自己反省の苦しめたたかいたわけたのだが、伊豆の踊子などからよせられた好意がその契機となつたのである。

孤児の環境からくる必然の孤児の感情は、当然康成の心に流れている。

一般の人々からみれば、孤児の持っている孤児の悲哀は不幸であらうけれども、孤児自身にとってはそれが日常の感情であってみれば、不幸と感ぜられないのかもしれない。特に康成のように幼少の時から孤児の環境に育って来たものにとっては、孤児の感情が何物かわからないであろう。いわば無意識のものである。この無意識の感情は、康成が「人の夫となり人の親となり、肉親たちに取り囲まれる」ようになって消えはしないだろう。康成自身が語るように全作品、全生涯の底を貫いて流れるものであろう。

しかし、ここで考えておきたいのは、そういう無意識の底を流れる孤児の感情ではなく「顔も知らない父母の死のために流す甘い涙は幼稚な感傷の遊戯なのだ。」「感情の因習や物語の模倣で悲しむものか」と思った、その感情のことである。

それは一種の孤児根性である「心の張り」「意気張り」から生まれたものである。

この感情が「かえて康成をいびつなものにして」いたのである。

「明らかに幼い時から肉親の愛を受けないことに原因している恥ずべき心や行いを認めて人生が真暗になることがたびたびある」といつているように、孤児根性でゆがんでいる事実があったであろうが、それよりむしろ、孤児根性でゆがんでいるのではなからうかと意識過剰になることがかえて康成をゆがませていたようである。

3 孤児根性の超克

前に引用した「伊豆の踊子」第五章後半の一節は前章で述べたよ

うな「日常の自分」からの脱出を願って伊豆の旅に出て来たことを語っている。

特殊な孤児感情からの脱出は成就されたと考えられる。その実現の過程を追ってみよう。

「私」が伊豆にやって来て二日目、湯ヶ島へ来る途中、踊子と初めて会った。

「……私が湯ヶ島へ来る途中、修善寺へ行く彼女たちと湯川橋の近くで出会った。その時は若い女が三人だったが、踊子は太鼓を掲げてゐた。私は振り返り振り返り眺めて、旅情が自分の身についたと思つた。」（岩波文庫58p）

旅情が身につくというのは、芭蕉が奥の細道で、「心もとなき日数重なるまゝに、白川の隅にかゝりて旅心定まりぬ。」と誓っているが、この旅心定りぬと同じ心的状態であろう。（野地潤家先生指摘）芭蕉の場合は江戸を立って、日数が経つにつれ旅に馴染むようになり、白川の関まで来ると、すっかり旅の心になったといふのである。旅の心になるというのは、日常の諸感情を捨て、あるいは忘れて、移りゆく旅先の風物に心をとどめることであろう。そのことは前引用の「私」にも言えることなので、ふと、すれちがった踊子たちに心をひかれ、振り返り振り返り眺める「私」はまさに旅の心が定まった、すなわち旅情が身についたと言つてよいだろう。

ところで、康成における日常の感情といふのは、少なくとも、この伊豆の旅当時に於いては、山本健吉も認めるように「孤児の感情」であった。だから旅情が身につくということは、作者にとつては、一時的にもせよ、「孤児の感情」から離れること、忘却することであった。

旅芸人との偶然の出会いには、息苦しい憂鬱から抜け出す糸口となつたのである。

湯ヶ野三日目の夜、宿屋へ流して来て、踊子が板敷で踊るのを「私」は一心に見た。そこで「私」は意識的に旅芸人に近づこうとしたのである。旅において、心をとどめ続けるものがあるというの、一そう旅情をますものがあるということにちがいない。

旅に出て四日目、天城峠の茶屋で、期待どおり旅芸人の一行に会つた。

踊子は自分の座蒲団を外して「私」にかけさせてくれた。煙草を取り出すと煙草盆を引き寄せてくれた。こうした、なにげなく見せる踊子の好意は、のち親しくなるにつれ、いよいよ深くなつてゆくのである。そして、このことは孤児感情脱出の決定的要因ともなるのであるが、「私」と踊子の愛情の交流については紙面に余裕がないので考察を割愛する。

茶屋を出て一行に追いついた「私」は下田まで一緒に旅をしたいと言つた。彼等も喜んだ。

湯ヶ野の温泉場で「私」は栄吉という一行の男と内湯につかり、その男の身の上話を聞いたが、男の帰りがけに、

「これで柿でもおあがりなさい。二階から失礼。」と言つて、私は金包みを投げた。男は断つて行き過ぎようとしたが、隨に紙包みが落ちたままなので、引き返してそれを拾ふと『こんなことをなすっちゃいけません。』と抛り上げた。それが煙屋根の上に落ちた。私がかもう一度投げると、男は持つて帰つた。」(岩波文庫65ペ)

翌日、栄吉は朝の九時過ぎに「私」の宿を訪ね、湯に誘つた。そしてその夜、流しに来た男と三人の娘は「私」の部屋にやつて来

て、十二時過ぎまで遊んで行つた。

湯ヶ野三日目の朝は出立の約束だったが、お座敷がありそうだから一日延ばすという彼等にすすめられて「私」もそうすることにした。

おふくろである四十女は、明後日が旅で死んだ赤坊の四十九日にあたるので下田で心ばかりのことをしてやりたいと思つている、失礼だが不思議な御縁だから拜んでやつてくれと言つた。

その日も、男や三人娘は「私」の宿に遊びに来た。そして、内湯と一緒に入ろうとさえ誘つた。

その夜は「私」が木賃宿を訪れて踊子に本を読んでもやつたり、旅で死んだ子供の話の話を聞いたりした。

茶屋の婆さんからは「あんな者、どこで泊るやら分るもののございますか、旦那様。お客様があればあり次第、どこにだつて泊るんのございますよ。今夜のあてなんぞございますものか」(岩波文庫60ペ)といわれ、宿屋の純朴で親切らしいおかみさんからは「あんな者に御飯を出すのは勿体ない」(岩波文庫74ペ)といわれる旅芸人「マ」物乞ひ旅芸人村に入るべからずマという立札が示すように、社会外に押し出された旅芸人に対して、上に述べて来たような「好奇心もなく、軽蔑も含まない、彼等が旅芸人という種類の人間であることを忘れてしまつたやうな、『私』の尋常な好意は、彼等の胸にも沁み込んで行」(岩波文庫75ペ)だったのである。

この人間を人間として扱ひ、差別をしない美しい好意が彼等の胸に沁み込んで行けば行くほど、彼等から「私」に示される好意が厚くなるというわけで、ここに本来の人間的美しい交渉が成り立つといふことになるのである。

「私はいつの間にか大島の彼等の家へ行くことにきまつてしまつていたし、正月には私が手伝つてやつて、波浮の港で皆が芝居をすることにもなつていた。

夜半に木賃宿を出る時、娘達は送つて出、踊子は下駄を直してくれたし、下田へ向う途中の山道で踊子は、「私」の足もとにしゃがんで袴の裾を払つてくれた。

また水をつけた女達は「さあお先きにお飲みなさいまし。手を入れると濁るし、女の後は汚いだらうと思つて。」(岩波文庫80ペ)と「私」を待つていてくれた。

踊子は「私」のために竹をとつて来て、杖にとくれた。

以上のような、さまざまの好意を見せてくれた旅芸人たちは次のような言葉を交わすのである。

「……暫く低い声で續いてから踊子の言ふのが聞えた。

『いい人ね。』

『それはさう、いい人らしい。』

『ほんとにいい人ね。いい人はいいね。』(岩波文庫82ペ)

「この物言ひは単純で明けつ放しな響きを持って」おり、「感情の傾きをばいと幼く投げ出して見せた声だった」が、これを聞いた「私」は自分自身にも「自分をいい人だと素直に感じることが出来た」(岩波文庫82ペ)のである。

「私」の自然な行為が彼等に好意として胸に沁んで行き、彼等に「世間尋常の意味で自分がいい人に見えることは言ひやうなく有難い」(岩波文庫82ペ)ことだったのである。

なぜなら、「私」の性質が孤児根性で歪んではいないということの証明であり、その自信をつけてくれたからである。

ここにおいて、「私」すなわち康成の特殊な孤児感情からの脱出は成就したとみてよいであらう。

その後にも好意の交渉は続く。下田で「私」は法事に花でも買って供えてくれと包金を榮吉に与えている。

一方、芸人は鳥鍋で飯を食つているところへ訪れた「私」に、女が箸を入れて汚いけれども言つてすすめてくれた。

また、「私」が伊豆を出立の朝、送つてきた榮吉は敷島四箱と柿とカオールという口中清涼剤を買つてくれた。その榮吉に「私」は鳥打帽をやつた。

以上旅芸人の一行と「私」との交渉を中心にしたのであるが、旅芸人以外の人々との好意の交渉もみられる。これもまた、特殊な孤児感情からの脱出と無関係ではない。

まず茶屋の婆さんとのことである。雨に濡れてふるえている「私」に「おや、旦那様お濡れになつてるぢやございませんか。こちらで暫くおあたりなさいまし、さあ、お召物をお乾かしなさいまし。」と言つて、手を取るようにして、自分たちの居間へ誘つてくれた。殆どには長年中風を患つて、全身が不随になつてしまつたという爺さんがいたが、帰る時に「お爺さん、お大事になさいよ。寒くなりませうからね。」と「私」は心から言つて立ち上つたのである。

そして、お代として五十銭銀貨を一枚置いただけだったので、お婆さんは「勿体なうございませう。お粗末いたしました。お顔をよく覚えて居ります。今度お通りの時にお礼をいたします。この次もきつとお立寄り下さいまし。お忘れはいたしません。」(岩波文庫61ペ)と「私」のカバンを抱きかかへて渡そうとせずには峠のトンネルまで送つてきたというのである。

ここに美しい好意がみられるのである。もちろん、単に五十銭という、片田舎においては法外なお代を中心として展開されたようにみえるけれども、それを支えている人間の真情がうかがわれるのであり、それがここにおいては重要なのである。

次は下田の乗船場で土方風の男から水戸へ帰るといふ婆さんの世話を頼まれたことである。銀山で働いていた伴とその嫁を流行性感冒で亡くし、三人の孫をつれて、国の水戸へ帰るといふ、何もわからない婆さんの世話を「私」は快く引き受けたのである。「……あなたを見込んで頼むだがね。」という土方のことばには一種の嫌らしさがあるのだが、やはり土方からも「私」が「いい人」に見えたと考えることは可能である。

特殊な孤児感情からの脱出は、天城峠から下田まで旅をともし、甕子を中心とする旅芸人との好意の交渉により、あるいは、茶屋の婆さんや土方風の男との交渉により成就したのである。

「世間尋常の意味」で「いい人」といわれ、自分でもそれを信じていることができたのが「私」の心に慰藉と快癒をともたらしたのである。

「頭が空っぽで時間といふものを感じなかった。涙がぼろぼろカバンに流れた。」

「私は何も考へてゐなかつた。ただ清々しい満足の中に静かに眠つてゐるやうだった。」

「頭が澄んだ水になってしまつてゐて、それがぼろぼろ零れ、その後には何も残らないやうな甘い快さだった。」（岩波文庫88p）

これらの表現にみられるのは、孤児感情からの脱出に対する喜びであり、それを可能にした人々の好意と信頼に対する感謝の念である。

とりもどした精神の平衡をよく示しているのが次の一節であろう。

「少年が竹の皮包を開いてくれた。私はそれが人の物であることを忘れたかのやうに海苔巻のすしなぞを食った。そして少年の学生マントの中にもぐり込んだ。私はどんなに親切にされても、それを大変自然に受け入れられるやうな美しい空虚な気持だった。明日の朝早く婆さんを上野駅へ連れて行って水戸まで切符を買つてやるのも、至極あたりまへのことだと思つてゐた。何もかも一つに融け合つて感じられた。」（岩波文庫88p）

4 伊豆の旅の意義

「伊豆の甕子」の中の一節を中心として、康成における伊豆の旅の動機とその旅が彼にもたらしたものとを考察してきた。

さて、「伊豆の甕子」の原型が書かれた、康成二十四歳の時の「湯ヶ島での思い出」には、康成自身が伊豆の旅の動機とそのままらしたものはっきり自覚している文章がある。次にそれをあげて、伊豆の旅の持つ意義をはっきり確認しておきたい。この意義をはっきりすることは「伊豆の甕子」のテーマを考察するのに必要である。

「私が二十歳の時、旅芸人と五六日の旅をして、純情になり、別れて涙を流したのも、あながち甕子に対する感傷ばかりではなかつた。今でこそ、甕子はものごころつき初めた日に、女として淡い愛心を私に動かしてくれたのではなからうかと、下らない気持で甕子を思ひ出す。しかし、あの時はさうではなかつた。幼少から、世間

並みではなく、不幸に不自然に育つて来た私は、そのためにかたくななゆがんだ人間になって、いちけた心を小さな殻に閉ち籠らせてゐると信じ、それを苦に病んでゐた。人の好意を、こんな人間の私に對してもと一入入りがたく感じて来た。さうして、自分の心を畸形と思ふのが、反つて私をその畸形から逃れにくくもしてゐたやうである。」

「しかし、自分をそんな風に思ふのは、私にさうした欠陥のあるのは勿論だが、自分の異常な境遇に少年らしく甘えてゐる感傷が多分にあり、感傷の誇張が多分にあると気づいたのは、人々が私に示してくれた好意と信頼との御蔭である。これはどうしてと私は自分をかへりみた。それと同時に私は暗いところを脱出したことになつたのである。私は前よりも自由に素直に歩ける広場へ出た。」

「私は高等学校の寮生活が、一二年の間ひどく嫌だつた。中学五年の時の寄宿舎と勝手がちがつたからである。そして、私の幼少年時代が残した精神の病患ばかりが氣になつて、自分を憐れむ念と自分を厭ふ念とに堪へられなかつた。それで伊豆へ行った。」

「旅情と、また大阪平野の田舎しか知らない私に、伊豆の田舎の風光とが、私の心をそゆるめた。そして踊子に会つた。いはゆる旅芸人根性などとは似もつかない、野の匂ひがある正直な好意を私は見せられた。いい人だと踊子が言つて、兄嫁が肯つた一言が、私の心にぼたりと清々しく落ちかかつた。いい人かと思つた。さうだ、いい人だと自分に答えた。平俗な意味での、いい人といふ言葉が、私には明りであつた。湯ヶ野から下田まで、自分でもいい人として道連れになれたと思ふ。さうなれたことがうれしかつた。下田の宿の窓敷居でも、汽船の中でも、いい人と踊子に言はれた満足と、いい

人と言つた踊子に對する好感とで、こころよい涙を流したのである。今から思えば夢のようである。幼いことである。」（全集第十四巻 388p）

「自分を憐れむ念と自分を厭ふ念とに堪へられな」いで伊豆へ行ったという。「自己憐憫と自己嫌惡のために精神の平衡を失つていた康成が、それを回復したいと願つたことが伊豆へ旅をした動機である」（山本健吉・学習研究社 116p）ことは今や明らかである。その願ひは美しい踊子をふくむ旅芸人、その他の人々の好意の交渉によつて成就したわけである。

暗い心に明りがともつたわけである。

それは「暗いところを脱出」して「前よりも自由に素直に歩ける広場」へ出る明りとなつたのである。

5 「伊豆の踊子」の動機

伊豆の旅の動機は「伊豆の踊子」や「湯ヶ島での思ひ出」に語られたところで明らかになつたが、「伊豆の踊子」の原型をふくむ「湯ヶ島での思ひ出」という未発表の作品の動機は何であるるか。それを、「伊豆の旅」でもたらされた精神の快癒に對する感謝だと思ふのである。

孤兒性超克を可能にくれた踊子の好意、その他の人々の暖い愛情に對する感謝が「伊豆の踊子」原型成立の動機であり、「伊豆の踊子」の動機といつてよいと思つた。

ここに、「伊豆の踊子」でも『雪圍』でも、私は愛情に對する

感謝を持って書いてゐる。『伊豆の踊子』はそれが素直に現はれてゐる。『雪国』では少し深く入って、つらく現はれてゐる。」「全集第六巻あとがき(248頁)」という作者のことばを思ひ出すことができるのである。

6 「伊豆の踊子」の主題

山本健吉は「伊豆の踊子」を、「人の愛情に飢えていた孤独な『孤児』が、『単純で明けっ放し』な踊子の愛情に触れ、自分のいじけた畸型な心が、春の水が解けるように、暖い人間的感情を回復して行く喜びが奏でられているのである。」(近代文学鑑賞講座 108頁)といっている。「伊豆の踊子」が、簡明に、みごとに扱えられている。

「伊豆の踊子」の主題は、偶然に旅をともした旅芸人の一行、特にその中の踊子との好意の交渉によって孤児感情を脱出した一高校生の喜びである。

(35・1・14 稿 37・10・31 補稿)

(広島県立大柿高等学校教諭)